

日中文化交流史

⑧

鈴木 靖

坂上田村麻呂と諸葛孔明

奈良時代から平安時代の初め、日本の朝廷は蝦夷の人びとが暮らす奥州（現在の東北地方）に勢力を拡大していきます。しかし騎射に優れた蝦夷の人びとの抵抗は激しく、789年の第1回胆沢（岩手県奥州市）遠征では、朝廷軍側に千人以上の死者が出ました。この戦いで、蝦夷を勝利に導いたのが阿弓流為です。

朝廷はさらに794年と801年の二度に渡り、遠征軍を派遣します。朝廷との10年以上の戦いに疲れた阿弓流為らは、802年、兵士500余人を率いて投降しました。



阿弓流為と母礼の慰霊碑（京都清水寺）

阿弓流為とも

う一人の首領・母礼は、京都に送られ、処刑が決まります。ところが、これに異を唱えたのが、征夷大將軍として朝廷軍を率いた坂上田村麻呂でした。彼は阿弓流為らを奥州に帰し、蝦夷の人びとを招撫するよう訴えたのです。

『三国志演義』の中にこんな話があります。劉備の死後、蜀の南では異民族の王・孟獲が叛乱を起こします。宰相の諸葛孔明は、自ら平定に向かい、孟獲を7回擒えては7回縦し、ついに彼を心から帰順させたのです。

清の章学誠が「七分の实事、三

分の虚構」と評したように、『三国志演義』の内容は虚実交々なのですが、この話は東晋の習鑿齒の歴史書『漢晋春秋』にも見えるので、全くの虚構ではないようです。

では、田村麻呂はなぜ孔明と同じような招撫策を訴えたのでしょうか。

彼の父・坂上田村麻呂によれば、坂上氏一族は、三国志の時代に中国から朝鮮半島に渡り、応神天皇の時代に日本に渡来した中国系渡来人だといえます。田村麻呂は、父祖からこの大陸的な民族政策を聞き、蝦夷との共生を模索したのかもしれません。

しかし、京都の公卿らは「蝦夷は野獣のようなもので信用が置けない。せつかく捕らえた元凶を再び奥州に帰したのでは、虎を養って患いを遺すようなものだ」といって、阿弓流為らを処刑してしまいました。

1994年、阿弓流為と母礼の慰霊碑が、京都の清水寺に建立されました。この寺は田村麻呂が開基となって創建されたといえます。1200年の時を経て、3人の目にいまの日本はどう映るのでしょうか。

（法政大学 国際文化学部教授）